長野大学紀要　第41巻第３号　　49―61頁（261-273頁）2020

文法力を駆使した学習者の英語学習能力と、辞書を活用して未知語を検索する技能との相関

Correlation between Learners' Competence to Search for Unknown Words Using Dictionaries and Their Abilities with Grammar Knowledge

山　西　敏　博*

YAMANISHI,Toshihiro

１. はじめに

本稿は読解をする際に、辞書の活用は有効的か否か、また、どのような語学力を持った者に対して辞書の使用が有効であるのかを探ることを目的とする。

これまでの英語教育の世界では、読解の仕方を取り上げる際にはBottom-Up方式が通例であった。すなわち単語や熟語で読み手にとって未知の語句などがあれば、つぶさにそれらを辞書で調べ上げながら一語一訳の形式を取りながら訳読を図る、いわゆる「精読方式（Intensive Reading）」でその英文にじっくりと取り組みながら熟読をさせる方式を採っていた。ところが、1970年代、及び80年代になると、読解におけるTop-down方式が第２言語習得方法の中では主流を占めていった。その頃、研究者達の間では辞書を使わずに読み進めていく、いわゆる「速読方式（Rapid Reading）」及び「多読方式（Extensive Reading）」が数多く採用されていった（JACET教育問題研究会,2001）。本来読解の目的は記された文章を一定の速度で把握することであり、そのためにはTop-down方式においては必要な文字情報をすばやく処理する必要があり、未知の語句が出てきてもこれまでに読み手が得ている既知の情報を元にそれらの語句の内容を推測しながら読み進めていくという作業になるために、そのつど辞書を使って作業をしている余裕などないといった印象があった。こういった背景から辞書を使いながら文章を読んでいくことは、未知の事象に対する推察力を働かせる事が阻害され、またそのような能力が衰退してしまうといった懸念から、辞書の使用は推奨されてはいなかったという経緯がある。それに対してCarter及びMcCarthy（1988）は、このような見解に対しては経験的な事象よりも推測に対して重きが置かれると述べており、上記の見解に対して反論をしている。また、読解の際に辞書を使わせない理由として、文章を読み進めていく上で辞書を使うことによりそのつど、この未知の単語の意味はこのような意味である、といった短期記憶が読解に影響を及ぼしてしまい、結果として読解過程を阻害してしまうといった事も言われている。最終的には読解が受動的になってしまうという懸念も出されている。加えてCLIL（内容言語統合型学習）の観点からも、山西（2017）は長年この領域にて実践を施してきており、英語に関する教育は、枝葉末節の文法を中心とした解読や構文を細かく読み解いていく読解型方法よりも、英文として記されている「内容」を重要視しながら、その英文の中身に対して着目をしていく事で、英語を用いた学習はより深化を示していくであろうと推察している。

反面、語学学習において、辞書の活用は必要不可欠なものであるという事も半ば常識的に言われている。効果的に辞書を活用することで実際に記されている文に触れながら数多くの語彙を同時に習得し、様々な情報を入手していけるといった利点もある。このような双方の考え方から、前述したように、この論文では読解時において辞書の活用は有効的か否か、また、どのような語学力を持った者に対して有効であるのかを探ることを目的とする。

企業情報学部教授*

2. 先行研究

BensoussanやSim,Weiss(1984)は、外国語学習において辞書を用いていくことは必要に応じて行っていった方がよいと、辞書活用の効能を述べている。接頭語や接尾語などの知識が事前にあり、未知の語句に出くわした時にそういった事前情報を駆使して読みこなしていく能力が万人に備わっていれば問題はないものの、必ずしもそのような情報を持ち合わせていない場合には、辞書が大変有効な媒体となるのは自明の理である。

Summers(1988)は、学習者が未知の語が載っている文と、辞書にその意味が説明されている文との関係において、これら２つの文脈の中でその関係を理解しなければならない時に、辞書の活用は語彙習得においては有用であると述べている。これは英英辞典においてはよく見られる事であり、英英辞典にはその語の意味を説明する際に簡潔な文で説明されていることから、英和辞典よりもその語の持つイメージがわかりやすく、未知の語の意味をより詳しく知りたい時には英英辞典は有効なツールとなっている。更にSummersは「読者が自分の読んでいる文章の中で定義がはっきりとは理解できていない場合においては、辞書で未知の語を調べることにより読み手の中に語句や概念がしっかりと植えつけられるといった効果が備わり、それは論説文のような文体においてはより顕著である」と述べている。これこそ上記の英英辞典での例同様に、target wordに対して推測のみで漠然と意味を把握するよりも、その時点において、辞書でしっかりと意味を調べた上で確実に理解をした方が、読解に対する理解力は格段に上がるという実証になると考えられる。

また、語彙習得と読解力において辞書を有効的に使用する効果に関しての先行研究としては、投野（1988b）によると、中学１,２年生を対象とした実験において、辞書を使いながら読解テストを行った集団の方が、辞書を用いずに行った集団よりも点数は高かったという報告を示している。Luppescu&Day(1993)は、語彙習得における辞書使用の効能について次のような研究を行った。すなわち、実験群には辞書を使わなければ理解しにくいような対象となる語を17語含んだ短編を読ませ、統制群には同じ文章を辞書の使用をさせずに読ませた。そしてそれらの内容に関する択一テストを読後すぐに実施し、その成果を図った。すると、辞書を用いて読解を行った実験群の方が、辞書を用いずに行った統制群よりも得点ははるかに高かったという結果が出た。Knight(1994)は辞書を使って文章を読む事で、語彙テスト、及び読解力テストの両方においてどちらも高得点を生み出したという報告をした。

他方、読解テストにおいては辞書の活用は効果が示されなかったという報告もある。BensoussanやSim,Weiss(1984)は、辞書を使用する際に３つの条件を提示した。１つめには英和辞典のような２ヶ国語が記されている辞典の使用、２つめには英英辞典のような１ヶ国語のみで記載されている辞典の『使用、そして３つめには辞書を使用しないという条件であった。大学生にあるタスクを与え、読後に理解力確認テストを上記の３つの条件下で実施した。その結果、読解に対する理解力においては３つの条件下とも大きな差異は出なかったという報告がなされた。NesiとMeara(1991)による実験ではBensoussanらの先行研究を追随して行った。すると、これもやはり択一式の読解テスト結果には辞書使用者と不使用者との間に差異は見られなかった。

このように語彙習得と読解において辞書を活用する上では、肯定実証と否定実証の両面が見られた。Luppescu&Day(1993)は、辞書は読解を行なう上では必要なツールとはなってはいるものの、その時々の被験者の状況によって結果は異なってくる事から必ずしも万能なものではないと唱えている。また、１つの語彙が定義する意味は１つに対応しているわけではなく、幾重にもその意味を持っていることも、読者を混乱させる原因の一つであると考えられる。一例として*happen*という語には29もの意味があり、それらには　.81の相関が見られるという報告がある。読み手が混乱する時には、自分自身対象となる文章においてどの意味が当てはまるのかといった弁別能力が備わっていなければ、辞書を活用する際に効果は生かせないということである。

辞書を有効的に利用する技術と能力との関連に関する研究も行われている。投野（1988b）によると、上記の２点にはより強い相関がある事が記されている。それによると、音声に関する項目、品詞、派生語など13の項目で学習者の能力を測るべく70の設問を設定して辞書を使う技術について質問を取った結果、辞書を活用することは、これまでに持っていた様々な技術の統合でなされるという事が実証された。

また、投野（1988a）は、辞書の活用に関して更に異なったアプローチを試みた。すなわち、辞書を使う課程においてエッセイを書かせる際には有効的な利用がな

されるのではないかという仮説に基づいて行われたものであった。それによると関連性のない単なる文を書かせる形式とエッセイのようにまとまった形の文を書かせる形式とでは両方とも辞書の活用は有効であるということが立証された。文章を記す際に論旨展開を思い起こしたり、その他の文章を構成する時点で、辞書は効果的に用いられたものと推察される。

山西(2012)は、他方、テスティングの観点から長年にわたり実践を行ってきている。その中で、一般的な英語学習の際には、辞書を用いて文章を精読することを重視している一方で、未知の語彙は文章の中からある程度推測して速読しながら読み進めていく事で、英文による試験問題を解く際には時間との戦いの中でより効果が出るのではないかと推察している。

3. 問題提起

これらの点からより4点の調査項目が考えられる。第1に、辞書を活用する事で読解をする際に効果があるかどうかという事である。すなわち、読解をする際には辞書は有用であるという意見がなされている(投野,1988a,Knight,1994)。一方、辞書の活用は読解には効果は示さないという見方をする者もいる(Bensoussan,Sim,Weiss,1983, Nesi,Meara,1991)。第2に、辞書を活用することは、どのような能力を持った被験者に対して効果的であるかという事である。

Knight(1994)は上記したように語彙能力が低い集団ほどその恩恵を受ける可能性が高いということを示した。第3に、辞書を用いる上で文法知識は必要があるだろうかという事である。その点については関連性はあると述べている研究者もいる(Scholfield, 1982, Bensoussan et al, 1984)。第4は、未知の語句を多義語として当てはめていく事はLuppescu&Dayが指摘するように辞書を活用する者にとっては問題があるのかという点である。

これらの項目を調査すべく、本論では文章を読解する際に、文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できるのかといった関連性を調査する。英検形式の文法構文テストを受験させ、更に辞書を使用させた上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連があるかどうかを調査し、それによって与えられた文脈の中でより適切に意味を理解できるかどうかについて調べる。

4. 研究仮説

1)英検形式の文法構文テストと、辞書を使用させた上での読解テストとのそれぞれで出された得点間に、関連性はある。

2)文法力がある被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある。

3)多くの意味を持つ語に出くわした際に、その文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める。

5. 研究方法

5. 1　研究対象者

この研究では高校1年生81名を被験者とした。英語検定試験(英検)の取得状況を被験者の現在の持つ英語学力と仮定した場合、英検5級(中学1年生修了程度)取得者は6名(7.4%)、4級(中学2年生修了程度)取得者は15名(18.5%)、3級(中学修了程度)取得者は19名(23.5%)、準2級(高校中級修了程度)取得者は1名(1.2%)、未取得者は40名(49.4%)である。

5. 2　研究対象資料

2002年度の英語検定試験(英検)3級1次筆記試験を用いて、これをPlacement Testの代わり(Pre-Test)として用いた。この試験の成績によって語彙能力が高い実験群集団(辞書使用可)と語彙能力が低い実験群集団(辞書使用可)、また、語彙能力が高い統制群集団(辞書使用不可)と語彙能力が低い統制群集団(辞書使用不可)というように各組を4集団に分類した。読解教材(Post-Test)は2000(平成12)年度英検準2級1次試験(p.124、B)の長文を採用した。語数は269語であり、被験者にはレベルが多少高度なものになっている。

5. 3　妥当性

Nunan(1993)は科学的な論文には「妥当性」と「信頼性」の双方が必要であると述べている。日本国内における多くの中学・高校では生徒の英語学力能力を測るため英検の受験を勧めている。「妥当性の高さ」とは測定したい能力の測定が直接的であればあるほど、また、能力の上位者と下位者の間との差異がある程度生じるような問題設定になっている、すなわち、弁別力が強い状態であればあるほどその高さは証明される(高橋,1999 p.122)。英検の1次試験問題の難

易度は問題集の中には正答率が示されているものもあり（付録A参照）、問題に応じて易から難まで多岐に渡っているので妥当性は高いものと思われる。英検協会からは妥当性の具体的な資料の提示はされていないものの、前述の正答率から派生する問題の難易度が広範囲に渡っていることや、1963年以来この試験が実施され数多くの受験生に指示されてきていることから妥当性は極めて高いものと考えられる。

5．4　信頼性

「信頼性の高さ」とは「能力が同じであればいつでも同様の結果が現れる」（高橋,1999 p.122）ことを意味する。そのような点から英検は客観テストの方式を採用し、かつ各得点が全て1点配点となっているので、被験者の主観が入りにくく採点も簡潔であるといった観点から客観性は高い。加えて中・高等学校在学中に英検で2級を取得した者がセンター試験英語科目試験において獲得する得点において、両者の相関はある程度はあるという先行研究がなされている（山西,2001）ことからも生徒の英語学力を測るために英検を用いて判定していくということは、大学入学への合格率が高くなることが予測される事から、信頼性は高いものと考えられる。

5．5　得点の扱い

英検を用いて各集団にPlacement Testを行なって4集団に分類し、それぞれの集団が辞書を用いた場合、用いなかった場合において獲得した得点を比較、分析した。

5．6　計画

この研究では、英検形式の構文テストと辞書使用テストの2種類の試験を用いて行なう。構文テストは40題の設問があり、その設問では英文の括弧内に正しい語句を入れる択一方式が採用されている。

例:Jane always（　　）when she sees sad movies.
1. arrives　2. cries　3. cooks　4. teaches

一方、辞書使用のテストとは、英和辞書を用いて読解文を読みながら本文の中で多くの意味を持つ語を抽出し、その中から適切な意味を選ぶことで被験者の能力を測る試験である。この試験の中では、被験者が辞書を使おうかどうかと考える過程や、文脈の中から適切な語を選ぶという過程も含めて測ることになっている。検査方法は英文和訳であり、課題としては少なくとも1つの多義語を含んだ7つの英文を訳出させる形式を採用した。

読解教材は2000（平成12）年度英検準2級1次試験（p.124、B）の長文を採用した。語数は269語であり、被験者にはレベルが多少高度なものになっていることから辞書を引く必要が出てくる。加えて多義語も含まれていることから辞書を引いて読み進めていかなければ進行しないものとなっている。FleschのReadabilityは65.9であり、判断基準は標準的、高校2年生学習内容修了程度に匹敵する。

5．7　研究過程

最初の時間に、高校1年生の各組で2002年度の英語検定試験（英検）3級第2回・第3回1次筆記試験を構文テストとして用意し、これをPlacement Testの代わりとして用い、この試験の成績によって語彙能力が高い実験群集団（辞書使用可）と語彙能力が低い実験群集団（辞書使用可）、また、語彙能力が高い統制群集団（辞書使用不可）と語彙能力が低い統制群集団（辞書使用不可）というように各組を4集団に分類する。更に読解教材を行なう前に多義語の内容を提示したPre-Testを実施し、文脈上適切な語を選ぶ練習をさせる。

次の時間には辞書を用いる集団と用いない集団とで、それぞれ英検準2級1次試験の長文を読解教材として、これをPost-Testとして位置づけながら提示し、制限時間内で訳出させる。被験者には下線部で限定した一語（斜字体）が文脈から適切な訳出がなされているかどうかを調べる実験であるという目的は知らせずに実行させる。そこから、文法力を駆使して英文を解釈しようとしているかどうかといった能力を測定する。

5．8　データ分析

採点方法は以下のような形式でまとめ上げた。

1）構文テストは択一方式を採用していることから、回収して手動で採点を行なった。満点は40点である。
2）読解教材を行なう前に多義語の内容を提示したPre-Testは7点満点とし、文脈上適切な語を選ぶ練習をさせる。
3）辞書を用いさせた読解テストは本文中に出てきた多義語で正しい訳出がなされていれば1点を与えた。他の下線部においては、それらの語の訳出ができていてもいなくとも得点には反映されない。満点は7点

となる。

6. 結果

表１は構文テストとPre-Test、辞書使用可能な読解テストとの標準偏差と平均値である。被験者２組の平均得点は40点満点中22.3点であり、これは全得点の55.8%に相当する。また、Pre-Testと辞書使用可能な読解テスト（Post-Test）の平均値はそれぞれ2.70，4.48となっており、事前に練習をした成果が伺える。

表２は構文テストとPre-Testとの相関を示したものである。これによると、双方の相関は存在しなかった。

表３は読解テスト（Pre-Test）間の相関関係を示したものである。これによると、ここでもそれぞれにおいて相関は見られなかった。

研究仮説の第２項目である「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」に関して、被験者をPlacement Testの代わりとして用いた構文テストのできばえによって語彙能力が高い実験群集団（辞書使用可）と語彙能力が低い実験群集団（辞書使用可）、また、語彙能力が高い統制群集団（辞書使用不可）と語彙能力が低い統制

表１　構文テスト、Pre-Test、辞書使用可能な読解テストとの標準偏差と平均値

N=80	構文テスト	Pre-Test	辞書使用可能テスト（Post-Test）
Mean	22.3(55.8%)	2.70	4.48
Standard Deviation	6.85	1.25	1.50

表２　構文テストとPre-Testとの相関

founded	**.16**	**work**	**.15**	**name**	**.22**	**found**	**.23**
however	**-.11**	**whole**	**.02**	**country**	**.15**		
Total	**.12**						

n.s.

表３　読解テスト(Pre-Test)間の相関関係

	founded	**work**	**name**	**found**	**however**	**whole**	**country**
founded	**——–**	**-.14**	**.13**	**.04**	**-.09**	**-.05**	**.15**
work	**.14**	**—**	**.96**	**.88**	**-.20**	**.19**	**.19**
name	**.13**	**.96**	**—-**	**-.13**	**-.76**	**-.01**	**.16**
found	**.04**	**.09**	**-.13**	**––**	**-.02**	**.10**	**.01**
however	**.09**	**-.20**	**-.76**	**-.02**	**—**	**.02**	**-.14**
whole	**-.05**	**.02**	**-.01**	**.10**	**.01**	**—**	**-.05**
country	**.15**	**.19**	**.16**	**.01**	**-.14**	**-.05**	**—-**
Total	**.21**	**.27**	**.19**	**.27**	**-.03**	**.17**	**.19**

n.s

	Mean	**SD**		**Mean**	**SD**
founded	**.20**	**.40**	**however**	**.07**	**.26**
work	**.85**	**.36**	**whole**	**.12**	**.33**
name	**.63**	**.49**	**country**	**.12**	**.33**
found	**.70**	**.46**			

群集団（辞書使用不可）というように各組を４集団に分類した。得点率が55%以上の集団を上位集団とし、それ以下の集団を下位集団とした。更に辞書を使用することを許可する集団と許可しない集団の数もそれぞれおよそ半数ずつと均等に振り分けた。表４では集団数と平均値、及び標準偏差値を示している。

表５-１は４集団のPre-Testにおける平均値と標準偏差値を示している。一元配置法分散分析方法を集計方法として用いたが、それによると各集団で大きな差異が見られた。また、有意確率を算出してより細部に集団別の相関を分析していくことに加えて、この４集団の結果を示すために表５-２で一元配置法分散分析方法を用いた。それによると、大きな相異が見られた（F(80,3)=7.864, p<.001）。

また、表５-３より集団AとC,D及び集団BとC,Dとの間に相関が見られた（p<　.001）。一方、集団AとB、集団CとDとの間には相関は見られなかった（p<　.001）。

表４　4集団内の構文テストにおける平均値と標準偏差値

	N	Mean	SD
上位集団Ａ（辞書使用　可）	20	28.7(71.8%)	3.63
上位集団Ｂ（辞書使用不可）	20	28.7(71.8%)	3.61
下位集団Ｃ（辞書使用　可）	19	16.4(41.0%)	3.79
下位集団Ｄ（辞書使用不可）	21	16.3(40.8%)	3.93

表５-１　４集団のPre-Testにおける平均値と標準偏差値

	Mean	SD
上位集団Ａ（辞書使用　可）	3.36(48.0%)	.76
上位集団Ｂ（辞書使用不可）	2.90(41.4%)	.99
下位集団Ｃ（辞書使用　可）	2.11(30.1%)	1.28
下位集団Ｄ（辞書使用不可	1.50(21.4%)	1.05

表５-２　４集団のPre-Testにおける一元配置法分散分析方法

	SS	df	MS	F
間	29.290	3	9.763	7.864
内側	95.599	77	1.242	p< .001
計	124.889	80		

表 5-3　　集団同士の多重比較（LSD）

	上位集団A	上位集団B	下位集団C	下位集団D
上位集団A	—	—	＊	＊
上位集団B	—	—	＊＊	＊＊＊
下位集団C	*	—	—	—

＊ p<.001　** p<.05　*** p<.01

表6-1　4集団における読解テスト(Post-Test)の平均値と標準偏差値

	Mean	S D
上位集団A（辞書使用　可）	4.59(66%)	1.50
上位集団B（辞書使用不可）	4.63(66%)	1.31
下位集団C（辞書使用　可）	4.53(65%)	1.65
下位集団D（辞書使用不可）	3.50(50%)	1.31

表6-2　4集団のPost-Testにおける一元配置法分散分析方法

	SS	df	MS	F
間	8.667	3	2.889	1.297
内側	171.555	77	2.228	n.s.
計	180.222	80		

表6-3　読解テスト(Post-Test)間の相関関係

	founded	work	name	found	however	whole	country
founded	——	.09	.14	-.16	.18	.15	-.13
work	.09	—	.24*	.82	.18	.09	.04
name	.14	.24	—-	-.75	-.13	-.02	.17
found	-.16	.08	.08	—	.11	.18	.12
however	.18	.18	-.13	.11	—	.16	-.07
whole	.15	.09	-.02	.18	.16	——	-.20
country	-.14	.04	.17	.12	.07	.20	—
Total	.18	.25	.21	.19	.22	.25	.13

* p<.05

	Mean	SD		Mean	SD
founded	.88	.33	**however**	.57	.50
work	.46	.50	**whole**	.53	.50
name	.83	.38	**country**	.48	.50
found	.72	.45			

表6-4 集団別　構文テストと読解テスト(Post-Test)間の相関関係

	集団A	集団B	集団C	集団D
founded	.28	-.01	.20*	.32**
work	.44	.20	.20	.34
name	.24	.21	.10	.36
found	.26	.26	.17	.20
however	.44	.24	.24	.21
whole	.44	.23	.24	.15
country	.27	.29	.13	.37

* p<.05　** p<.01

表6-1は4集団における辞書使用許可の読解テスト(Post-Test)の平均値と標準偏差値である。ここでも表6-2より一元配置法分散分析方法を集計方法として用いたが、それによると各集団では差異は見られなかった。しかしながら、表6-3,4においては、一部に関して相関が見られた。

7. 考　察

本研究では4. の研究仮説で提示した1)「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用させた上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」、2)「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」、3)「多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」という3点について焦点を絞ってきた。それらを解明していくために様々なデータ処理を行い、より信頼性のおける解釈を施してきた。上記の仮説に対しての検証を施していくが、その上で結果としてあらゆる興味深い点が見られた。

まず、表2では構文テストとPre-Testとの相関は見られなかったが、表6-4では構文テストとPost-Testとの相関はわずかながらも見られた。また、表5-2では4集団のPre-Testにおける一元配置法分散分析方法による相関においては明確な相関関係が現れていたが、表6-2では4集団における辞書使用許可の読解テスト(Post-Test)の間には相関関係は現れなかった。これは研究仮説1で提示した「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用させた上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」についての立証は必ずしもなされてはいなかったことにつながる。すなわちSchofield(1982)が述べていたように、文法知識が予め備わっていることによって辞書から必要な意味を引き出す際には、その知識が予備となって適切な訳出がなされるということは必ずしも言えなかったということが言える。しかしながら、ここではPre-Testの時点で単語語彙力の差があった被験者に辞書使用の許可を与えることによって獲得得点に差異がつかなくなったということで、辞書を活用することの影響が出たものと考えることができる。

一方、これはBensoussanら(1984)が主張していたこととは食い違いが生じてくる。すなわち、Bensoussanら(1984)は、能力が高くはない者にとっては辞書を活用することで得られる効果はさほどないと述べていた。なぜならば知識がないことにより構文を読み取る力が弱く、結果として未知の語を推測するといった技術も劣ってしまうからである。本研究において2つのテストで測られた相関関係があるといった実証から、文法知識が事前にあるなしに関わらず、どのレベルの被験者であっても辞書から得られる知識はあると結論付けることができる。すなわち、それは能力の高低に関わることなく誰しもが辞書から得られる恩恵は受けることができるということになる。

研究仮説2「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」、および3「多義語に直面した際にその文の中で適訳

表7-1　各集団におけるPre-Testと読解テスト(Post-Test)との平均値

	集団 A		集団 B		集団 C		集団 D		集団平均	
	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T
founded	.32	.91	.27	.88	.00	.94	.00	.63	.15	.84
work	.95	.50	.88	.55	.72	.39	.75	.13	.82	.39
name	.95	.77	.64	.85	.33	.83	.38	.88	.58	.83
found	1.00	.68	.76	.82	.39	.50	.38	.88	.63	.72
however	.14	.64	.09	.58	.00	.61	.00	.25	.06	.52
whole	.18	.68	.12	.48	.11	.56	.00	.25	.10	.49
country	.09	.41	.24	.45	.00	.50	.00	.75	.08	.53
Total	3.63	4.59	3.00	4.61	1.55	4.33	1.51	3.77	2.42	4.37

P<.05

を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」についてはPre-Test、及び文章読解テスト(Post-Test)の結果より詳細な分析を行なっていく。

表7-1はそれぞれ訳出する際に焦点となった語において、4集団がPre-Test、及び文章読解テストで得た得点の平均値を表している。

表7-1から明らかなように、辞書使用許可のPost-Testにおいて4集団全てで高い数値を出している単語が3点ある。すなわち、founded(.91,.88,.94,.63 total .84)、name(.77,.85,.83,.88, total .83)、found(.68,.82,.50,.88, total .72) である。一方workは低い数値を出した(.50,.55,.39,.13, total .39)。ここで語彙集団を3つに分類する。すなわち、第1系(founded, name, found)、第2系(however, whole, country)と第3系(work)である。第1系はPre-Testを踏まえると比較的容易に意味が推測でき、第2系は出来がおよそ半々であったもの、第3系は意味が推測しにくかったものである。

第3系はPre-TestとPost-Testとでは文脈における意味が異なったために辞書を用いても意味が推測しにくかったと考えられる(work—Pre-Test時の意味:「働く」,Post-Test時の意味:「作品」)。一方、第1系はPre-TestとPost-Testとも意味が変わらなかったことから、文脈における意味は同じとみなされたために、辞書を用いて意味を推測することは容易であったと考えられる(founded—Pre, Post-Test時の意味:「設立する、創設する」、name—Pre, Post-Test時の意味「名づける」、found—Pre, Post-Test時の意味「見つけた、発見した」)。また、第2系ではwholeがPre, Postにおいて意味を同一にしたものの、howeverとcountryはそれぞれ意味が異なった(whole— Pre, Post-Test時の意味「全体」、however—Pre-Test時の意味:「どんなに~しても」,Post-Test時の意味:「しかしながら」、country—Pre-Test時の意味:「田舎」,Post-Test時の意味:「国」)。

表7-2より、集団Aは第1系の方が第2系を上回り、第3系も平均点は.50と半数にとどまっている。集団Bは集団A同様に第1系の方が第2系を上回っているが、獲得得点は集団Aよりは第2系においては取れてはいない。むしろ第1系内においては集団Aよりも平均して得点を獲得していることが読み取れる。加えて、第3系においては、平均点は.55と集団Aよりも獲得している。

集団Cはこれまでの集団同様に第1系の方が第2系を上回り、第3系も平均点は.39とおよそ3分の1にとどまっている。しかしながら、集団Aには若干及ばないものの、集団Bよりは第2系内において得点を獲得し

表7-2　各集団におけるPre-Testと読解テスト(Post-Test)との平均値
(獲得得点集団別)

	集団 A		集団 B		集団 C		集団 D		集団平均	
	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T	Pre-T	Post-T
founded	**.32**	**.91**	**.27**	**.88**	**.00**	**.94**	**.00**	**.63**	**.15**	**.84**
name	**.95**	**.77**	**.64**	**.85**	**.33**	**.83**	**.38**	**.88**	**.58**	**.83**
found	**1.00**	**.68**	**.76**	**.82**	**.39**	**.50**	**.38**	**.88**	**.63**	**.72**
however	**.14**	**.64**	**.09**	**.58**	**.00**	**.61**	**.00**	**.25**	**.06**	**.52**
whole	**.18**	**.68**	**.12**	**.48**	**.11**	**.56**	**.00**	**.25**	**.10**	**.49**
country	**.09**	**.41**	**.24**	**.45**	**.00**	**.50**	**.00**	**.75**	**.08**	**.53**
work	**.95**	**.50**	**.88**	**.55**	**.72**	**.39**	**.75**	**.13**	**.82**	**.39**
Total	**3.63**	**4.59**	**3.00**	**4.61**	**1.55**	**4.33**	**1.51**	**3.77**	**2.42**	**4.37**
Improving Rate(Pre-T/Post-T)	**1.26**		**1.53**		**2.79**		**2.50**		**1.81**	

ている。一方、集団Dは他の集団同様に第１系の方が第２系を上回っているが、獲得得点は第２集団においてはcountryだけが突出して取れている。加えて第１系内ではfoundedは全集団の中で最も低い得点ではあるが、他の２語は最も高い得点を獲得している。しかしながら、第３系においては、平均点は.13と最低の獲得得点となっている。

更により詳細な分析を行なっていく。研究仮説２「文法力を持った被験者の能力と彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」の分析において、表５-３よりPre-Testにおいて、集団AとC,D及び集団BとC,Dとの間に相関が見られたが、一方で集団AとB、集団CとDとの間には相関は見られなかった。加えて、Post-Testにおいては、各集団では相関は見られなかった。更にPre-TestとPost-Test実施後の獲得得点上昇率を算出したところ、集団Aは1.26であったのに対し、集団Bは1.53、集団Cは2.79、集団Dは2.50となった。これらの分析から、辞書の活用は語彙能力が下位の集団には有効であるということが立証された。だが、この調査だけで辞書の活用が有効であるということを結論付けるには早計であろう。表７-２より第２系で辞書を活用したことは、全集団で辞書を活用したことによる得点で差異を消した主要な要素となった。集団Aでは平均点でfoundedで.59を上げた反面、nameでは逆に.18、foundに至っては.32も点数を下げてしまっている。集団Bでは平均点でfoundedで.61、nameで.21、foundでは.6の上昇、一方、集団CではfoundedでP.94、nameでは.50、foundは.11の上昇、集団DではfoundedでP.63、nameでは.50、foundでは.50点上昇した。第２系においては全集団が得点を上昇させている一方で、第３系においては全集団が得点を減少させている。このことから、集団Aの反例が見られるものの、辞書の活用は本文中に表れる語を文意から推測することによって意味を類推させていくことがある程度有効的であると言うことができる。この推論はKnight(1994)の研究がその裏づけとなる。すなわち、言語的に能力が低い者は辞書を活用することによって語彙を習得する可能性が得られてくるといったものである。更にそれはBensoussanらの主張する、読解力が劣る者は辞書を活用しても得られるものが低いといった主張と相反するものである。

研究仮説３「多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」については曖昧な結果が出た。

表７-２からは３系統の語群が見出されている。すなわち、第１系と第２系、及び第３系に分類される語である。このことにより、第２系、及び第３系においては文脈の中で意味を取るのに手間取りがあったのに対し、第１系はそれが起こらなかったことを示唆している。しかしながら、第１系においては表７-２より集団AでPre-TestからPost-Testの段階でname, foundの２語で平均点を下げている。また、第３系では全集団がPre-TestからPost-Testの段階で平均点を下げている。このことから、多義語が文章を読んでいく際に障害となるということを読み取ることができる。しかしながら、第２系内での多義語の正答率はある程度高く出ていることも読み取れる。よって、仮説３においては必ずしも明確な回答が出ないことが立証された。

仮説３における回答が明確に出てはこない理由は２通りある。すなわち、１）本研究において多義語の明確な定義がなされてはいない、２）文脈内でどのような語数が適切かが制限されてはいないという点である。第１に、対象となる語が多くの意味を持つという語、すなわち多義語であるという定義はどのくらいの意味を持つ語から「多義語」と言っているのかという点が浮き彫りになる。列挙すれば、第１系内でもfoundedは大修館GENIUS英和辞典によると６通り（品詞別分類を除く。以下同様）の意味を持つ一方で、nameは15、found は前述のfoundとの意味の混同（ここではfindの過去形の意味）があったせいか同じ６通りでもどの意味で捉えていけばよいのかで戸惑いがあったものと推察される。同様に分析していくと、第２系内howeverは３通り、wholeは８通り countryは11通り,第３系内workは実に39通りの意味を持つ。しかしながら、解答のできがよかった系は必ずしも「多義語」の意味の多さとは比例はしてはいないことが読み取れている。

第２に、対象となる語が含まれている文脈がこの研究内では制限されてはいないという点である。すなわち文脈内に含まれる語の数が各下線部分によって差異があるということである。例を挙げれば、（１）<u>The British Museum in London was *founded* in 1753.</u> ではfound以外に理解していかなければならない語数が８語であるのに対し、（２）<u>It has a huge collection of *works* of art from all over the world.</u> ではworks以外では13、同様に（３）name ６語、（４） found ８語、（５）however ４語、（６）whole 11語、（７）country ８語 となっている。すなわち、最小４語、最大13語が含まれている文を読みながら全体の文脈を読みこなしていき、更にその中

で文脈に合致するような適切な意味をあてるといった作業が含まれていくことから翻訳にも困難をきたしていたものと思われる。文脈によっては対象となる語以外にも理解のしにくい語が含まれていたであろうとも推察される（例:sculptures, Lord Elgin）。よって辞書使用を許可された被験者は、辞書使用を認められなかった被験者よりもそのつど辞書を引きながら意味の推測を行なっていたであろうと考えられる。場合によっては文脈内での推察の方が理解しやすい部分が見られていたのかもしれない。それが集団Aにおける第１系の語である「name(Pre-T: .95, Post-T: .77)」,「found(Pre-T: 1.00, Post-T: .68)」で顕著に現れたと考えられる。すなわち意味を元来より定義づけて理解していれば問題が起こらなかったかもしれない語（「name:名前をつける、名前」、「found:findの過去（わかった、見つけた）」）であるにもかかわらず、Post-Testで辞書の使用を認めたばかりに多義語の定義に惑わされてしまい、更に文脈上に合致する語を辞書の定義の中から見つけ出そうとするあまりに逆に混乱をきたし、結果としてPre-Testよりも点数を下げたと推察することができる。このようなことから研究仮説３は回答が明確に出てはこないものと考えられる。

8. 結　論

本研究により、文法構文における理解力を通じて、辞書を用いて未知語を検索する能力と既知の文法力を備えた学習者の能力との関係に関する研究が実証された。これにより高校生における文法理解力と辞書を活用する能力も判定することができた。すなわち、辞書の活用は語彙能力が下位の集団、すなわち英検３級１次筆記試験で55%以下の獲得得点者、には有効であるということが立証された。この被験者であれば辞書の中から適切な意味を選び出すことが適切であるということが言える。しかしながら、「英検形式の文法構文テストと、辞書を使用させた上での読解テストとのそれぞれで出された得点との間に関連はある」については必ずしも立証できず、「文法力を持った被験者の能力と、彼らが辞書を効果的に利用できる事への関連性はある」については立証できたものの、「多義語に直面した際にその文の中で適訳を見つけていく事は、辞書を活用する者にとっては困難を極める」という点については、これも必ずしも立証することはできなかった。なぜならば本研究においては多義語の明確な定義がなされてはおらず、文脈内でどのような語数が適切かが制限されてはいなかったからである。これらの改善については今後より詳細な研究を待ちたい。

この研究から、未知の語があった時には辞書を用いて検索することがより有効である、加えて学力的に低い者であればその効果はより発揮されるという実証はなされたものであるということができる。無論辞書の活用に関する研究はこれまでにも無数にあり、ここでは高等学校生１学年で英検３級程度の実力を備えた者を対象としての実験結果であるということを付加する。

今後は紙の辞書と電子辞書を使用しながら対照実践を行っていくという、同じ「辞書」を活用していく上の比較がなされていくであろう。他方、「印刷物として出版されている辞書（紙辞書）」と「電子辞書」による検索であればどちらがより効果的か、また「紙辞書」と「電子辞書」とを活用していく上での利点や欠点はどこにあるかといった比較対照の実験も見込まれていくであろう。さらに「紙辞書」を活用していく方法と、辞書を用いることなく推測で読みこなしていく方法、および「電子辞書」を活用していく方法と、辞書を用いないで推測で読みこなしていく方法とではどちらがより、未知の語を含んだ文章を読み進めていく際に効果が上がるかなど、興味のある研究分野は数多く存在する。この分野はさほど深くは開拓されてはいない分野である。一方で村田、山内（2004）らがさらなる研究を行なっていることから、今後ともより詳細かつ斬新な研究を行なっていく必要がある。

参考文献

Bensoussan, M. “Dictionaries and tests of EFL reading comprehension” ELT Journal 37 , 1983, pp.341-345.

Bensoussan, M., Sim,D., and Weiss, R “The effect of dictionary usage on EFL test performance compared with student and teacher attitudes and expectations” Reading in a Foreign Language 2, 1984, pp.262-276.

Carter, R, and McCarthy, M. Vocabulary and Language Teaching Longman, 1988.

Knight, S. “Dictionary use while reading: The effect on comprehensions and vocabulary acquisition for students of different verbal abilities” Modern Language Journal 78 ,1994, pp.285-299.

Luppescu, S., and day, R.R. “Reading dictionaries

and vocabulary learning" Language Learning 43, 1993, pp.263-287.

Nesi, H. and Meara, P. "How using dictionaries affects performance in multiple-choice EFL tests" Reading in a Foreign Language 8, 1991, pp.631-643.

Nunan, D. Action Research in Language Education. in Edge & Richards (eds.),1993, pp.39-50.

Schofield, P. "Using the English dictionary for comprehension" TESOL Quarterly16 , 1982, pp.185-194.

Summers, D. "The role of dictionaries in language learning" in Carter et al.(eds.)

Tono, Y. " Assessment on the EFL learners' dictionary using skills" JACET Bulletin 19, 1988a, pp.103-126.

Tono, Y. " Can dictionary help reference skills and reading comprehension" Lexicographers and their works (Exeter Linguistics Studies 14), Ed. G. James, 1988b, pp.198-200.

JACET教育問題研究会　「(4)速読，(5)多読」第12章　4技能の指導:読む　『英語科教育の基礎と実践』三修社、2001年、103-104頁

高橋正夫「1.妥当性」第5章　評価　第4節　良いテストの条件　『英語教育学概論』金星堂、1999年、122頁

高橋正夫「2.信頼性」第5章　評価　第4節　良いテストの条件　『英語教育学概論』金星堂、1999年、122頁

日本英語検定協会「第1回一次試験　別冊解答」『英検準2級全問題集』旺文社、1997年、2頁

日本英語検定協会　「STEP Guide」旺文社、1997年、24頁

日本英語検定協会　「平成12年度第2回・3回筆記」3級1次筆記試験　『2003英検3級全問題集』旺文社、2003年、130-132頁、154-156頁

日本英語検定協会　平成12年度準2級1次筆記試験　『2003英検準2級全問題集』旺文社、2003年、124 頁

村田年、山内豊他「電子辞書と紙の辞書の相違と両者の使い分けに関する心理言語学的考察」『電子辞書研究会第1回大会』東京:早稲田大学、2004年

山西敏博「2017 衆議院議員選挙における英語による取り組み―CLIL」　メディア英語学会・新語、語法研究会　口頭発表　2017年

山西敏博　「英検取得級と大学入試センター試験英語科目の点数との相関関係」　第13回「英検」研究助成　研究部門　『STEP BULLETIN　Vol.13』(財)日本英語検定協会、2001年、40頁

山西敏博　「中等教育現場に有意な資格試験のありかたに関する研究―実用英語技能検定試験とTOEIC,その他資格試験との比較、および今後における課題」　第24回「英検」研究助成　研究部門『STEP BULLETIN　Vol.24』(財)日本英語検定協会、2012年、185頁

付録A

英検1次試験　正当率

問題番号	解答	正答率	問題番号	解答	正答率
(1)	4	D	(6)	3	C
(2)	3	D	(7)	1	C
(3)	2	D	(8)	2	D
(4)	2	E	(9)	4	D
(5)	1	E	(10)	4	B

(英検準2級全問題集　1997，第1回一次試験　別冊解答,pp.2)

☆正答率　A:100-80　B:79-60　C:59-40　D:39-20　E:19-0 (%)

(正答率:全受験者のうち、正答した受験者の割合―コンピューター算出)

付録B

次の文の「*イタリック体*」になっている部分の意味を記しなさい。

(1)They will *found* a new school in 2005._____

(2)He *worked* very hard to support his family. _____

(3)He *named* his son ALK after his adventure._____

(4)She *found* gold in Japan about 200 years ago. _____

(5)*However* hard you try, you cannot do it. _____

(6)We have 40 students in a *whole* class. _____

(7)I want to live in a quiet *country*. _____

付録C

下線部を和訳しなさい。辞書を使う許可を受けている者は辞書を用いてもよい。

(1)The British Museum in London was *founded* in 1753. (2)It has a huge collection of *works* of art from all over the world. The collection covers 2 million years of human history. Many people, however, come to the British Museum just to see the Elgin Marbles, a group of Greek sculptures. The sculptures are made of beautiful white stone and are 2,400 years old.

(3)The sculptures were *named* after Lord Elgin and (4) he *found* them in Greece about 200 years ago. Lord Elgin was a British diplomat in Turkey and, at that time, Turkey controlled Greece. Elgin loved ancient Greek art and wanted to introduce it to people in Britain, so the Turkish government allowed him to take the sculptures back to London.

It took several years for all the sculptures to arrive in Britain by ship. (5)*However*, there was one accident. A ship carrying some of the sculptures sank on its way to Britain in 1804. Fortunately, all of the sculptures were saved, and (6)in 1816 the British Museum paid 35,000 pounds for the *whole* collection.

The Marbles can still be seen at the British Museum today, but the Greek government has asked the British government to return them. One reason for this is because they were cleaned in the 1930s. According to some people, the cleaning damaged the whole stone. The Greek government also says that the marbles were not given but taken. But the British have refused, saying Britain has looked after the Marbles for a long time. (7)It is difficult to say which *country* is right, and this problem will take time and understanding to solve.　(269語)